

From:〇〇 商事 人事部 <*****@***.ne.jp >

To: moga*ri***n*****a*@***.ne.jp

件名 ; 森永 真理 様へ

本文 :

今回のご応募におきまして……

…… (省略) ……

……残念ながら、今回はご縁が無かったということで。

森永 真理 様の今後のご活躍をお祈りいたしております。

それ受け取った時、俺は悟った。

気付いてしまった。

この世界の真理。

構造・意味・目的を。

だからこそ、俺は理解出来たのだ。

俺が、

今から、

何を成すべきかを——

「———よし、死のう！」

答えなんて始めから決まっていたのだ。

天元突破するように手持ちのPCを天井に叩きつけ、

俺は友人の原付にまたがったのだった。

『 to you 』 作：マヒロー

俺の名前は 森永 真理。
大学の四回生だ。

いきなりで悪いが、あえて言おう。
俺は天才である。

物心付いた頃には周りからは『可愛い』と容姿についてチヤホヤされ。
自分の年齢を述べて『頭が良い』と褒め称えられるなど、既に高い知性も示していた。

小学校低学年の時にはケイドロで最後まで逃げ切るほどの高性能の運動能力を有していたし、小学校も高学年になると絵を描けば『ピカソ』の様だと褒め称えられ、リコーダーを吹けば『課題曲どころかオリジナル曲を吹いてしまう』などの圧倒的な芸術的センスまで獲得していた。

正に、チート。
『選ばれし人間』とは俺の為に在るかの様な言葉だった。

そんな、人生一< Very Easy ! >一 だった俺に転機が訪れたのは中学生の頃だ。

恋をした。
初恋、一目ぼれだった。

だが、彼女は『天才=人間チート』である俺でも手の届かない高嶺の花で。
運命と戦う気高い戦士だった彼女は、同じく運命と戦う力を持つ男でないと傍に居る事すら出来ない女性だったのである。

俺は泣いた。
光り輝く景色の向こう、そこで愛おしそうに男に寄り添う彼女の姿に俺の胸は張り裂けそうだった。

それでも諦められない俺は、せめて彼女の名前だけでも知りたくて、この苦しい胸の内を十年來の友人に打ち明けた。
その友人は、彼女とその男について非常に詳しかったのである。

友人は言う。

「ああ？ ……たしか、お前のかあちゃんと同じ名前だった筈だぞ。えーっと、何つたっけ……斗貴——」

————ガシャンッ！！

俺の初恋は、自宅のブラウン管を破壊する事で終わった。

ぶっちゃけ、母ちゃんと同じ名前とか冷めるわ。

とにもかくにも、
酷く傷ついた俺は留学する事を決意する。

俺の溢れんばかりの才能は、日本という小さな国では活かしきれない事は最早明白だったからだ。

決して、『海外ならきっとモテる』などという安易な発想からではない。

そうして、俺は意気揚々とニュージーランドへ留学した。
しかし、勿論懸念もあった。

この俺の溢れ出る男の色気を前に、現地の金髪美女達が次から次へと求婚してくるであろう事は容易に予想出来たからだ。

その懸念はある意味では当たり、大局的には外れていた。

俺は求婚されたのだ。
ただし、見事なまでのボンレスハムに。

さすがに博愛主義者の俺でも、加工された肉を愛する事は出来ない。
友人達の間ではいつの間にか恋人同士にされていたが、とにかく俺は下宿先の部屋に引きこもってひたすらランスをプレイする事でそれを乗り切った。

いつしか望郷の念を抱くようになった俺は日本の大学へ進む事を決め、
難関と言われる試験を潜り抜け、あの『+R』を見つける事が出来る世界的に有名な大学へと進学したのである。

その大学の名前はあまりにも有名すぎて、ここで言うまでも無い事だろう。

が、俺は未だに+Rが何なのか分からない。
噂では、『未来を作る力』とやららしいのだが――

「――なら、こんな事になるはずねーよな」

――回想終わり！

木の根元に足場を設置し、枝に業務用の紐を括り付けながら誰に言うでもなく俺はそう
呟いた。

ここは自宅から30km程離れた森だ。
なんか、自殺の名所だって誰かがツイートしてた様な気がする。

まあ、何かそんなデマだか何だか良く分からない情報を頼りに、友人から借りたままの
原付に乗ってうろうろしていた俺は、この木を見つけたのである。

この木は大通りから離れたかなり薄暗い場所にあって、確実に人通りが少ない事を予感
させた。しかも、少なくとも全く無いわけじゃない感じだ。

学生証をしっかりと右ポケットに入れている俺は、キチンと『大学がクソ過ぎて就職出来
ないんで死にます。就職課氏ね』的な事をしたための遺書を左のポケットに入れていた。

死ぬんだから、しっかり嫌がらせしてやりたい。
勿論、大学に対してだけじゃない。

この俺の人生を突然『Very Hard』にしやがったクソみたいな神に対してもだ。

「だから、この何か土俵みたいな縄が着いてる木を選んだんだぜ」

呟いて、木の根元を覗いてみると、確かに何か霊験あらたかっぼいしめ縄らしき何かが
括り付けられている。間違いない。

時刻も良い頃合だ。

勿論、周りには誰も居ない。

「死ぬか」

呟いて、準備した台にのり、輪っかに首を通そうとすると。

「……」

「……」

見たことも無い女と目が合った。

「——ッ!？」

あまりの衝撃に、声を出す事も出来ない。

それは向こうも同じらしく、お互い距離を取る様に顔を離し、無言で背を向けて木の影に隠れた。

——何だ？ 何が起こったっ!？

爆音を放つ心臓を抑えながら、冷静に状況を確認する。

ココは自殺の名所（っぼい）。

そして今は深夜で、人通りもないこの場所。

チラッと様子を伺うと、向こうも同じように様子を伺っていたらしくお互い慌てて顔を戻した。

「……っ」

息を飲む音が聞こえる。

どうやら幽霊では無いらしい。向こうも相当ビビってる。

縄と足場が若干見えたから、おそらく同じ自殺志願者だろう。

——長々と作業しといて、お互い気付かないとかありえねえだろ!!

と突っ込みたかったが、実際あったのだから仕方がない。

意を決した。

「あの、」

「あの、」

同時だった。

お互いビクッと震えて、さっきと同じように木の陰に隠れた。

——何だよ、何なんだよもうっ！

何もかも、タイミングが悪すぎる。

俺が我慢しきれず叫びだすより前に、その女は囁くように尋ねてきた。

「もしかして……ここで、死ぬ気ですか？」

「あ、ああ」

よくよく考えなくても、変な問答だ。

俺は伸びきったペヤングを仕方なく食べている様なやりきれない妙な気分になったが、そんな事はおかまいなしに女は続ける。

「すみませんが、2・3週間くらいずらして貰えます？ 心中みたいに思われたくないんで」

その女は堂々とすました顔で、自分の都合を押し付けてくる。

その様子に、腹が立った。

「嫌だ」

冗談じゃない。

こっちは『ご縁が無かった』とかいうワケの分からん勝手な都合から逃げ出すために死のうっていうのに、死ぬのまで他人の都合に左右されてたまるか。

「そっちがズラせば良いだろう！」

女に負けじと、ドヤ顔で宣言する。

と、女は顔を背けて舌打ちした。

「……こいつ、性格悪い」

「んだとコラッ！」

「あー、もう怒鳴らないでよ。うっとうしい！」

お互い死のうとする身の上だ。

遠慮とか有るわけもないし、怖い物も無いから脅しも賺しも通用するわけがない。

小一時間ほどお互い喚きあっても、議論はずっと平行線で。

「そもそもあんた、何で死ぬのよ？」

「それは……就職が決まらなくて」

「はあ～っ！？ あんた馬鹿なのっ！ 就職が決まらない程度で自殺なんて脳みそが腐ってるとしか思えないわ」

「うっせえっ、何にも知らないくせにッ！ じゃ、てめーは何で死ぬんだよッ！！？」

「そ、それは……彼氏に……………フラれて」

「うっわっ！ うっわ、ドン引きッ！！ メンヘラじゃん、完全な。マジで引くわ～」

「うるさいわねっ！ そんなんじゃないわよ！！ 彼は、彼はちがったの！！ 特別だったのッ！！！！」

「なーにが、違ったんだよ？ 大体、違ったって何と比べてんの？ 何人目の特別な人なの？」

「うるさい！ うるさいうるさいッ！！ キモ面の童貞の癖にッ！！！！」

「ど、童貞ちゃうわっ!!!」

足元がまるで見えなくなった頃。
埒があかないと思ったのか、その女はある提案をしてきた。

「分かった。2週間くれない？」

「お互い、自殺するのを2週間伸ばしましょう」

「……それで？」

「それで、お互いにお互いの時間を一週間ずつあげるの。その一週間の間に相手が自殺するのを諦めさせれば勝ち。これでどう？」

『頭良いでしょ?』と言わんばかり表情で、女はこちらを見上げてくる。

その表情で、コイツは馬鹿だと確信した。

「アホか、両方諦めるわけねーだろ。たかが一週間でよお」

「あら、自信無いの……私は絶対一週間でどうにかできるけどね」

「言ってる」

「じゃあ言うわ。さっさと負けを認めて帰りなさいよ、負け犬さん」

吐き捨てた台詞に被せる様に言って、その女は鼻で笑う。

普段の俺なら縮みあがって逃げ帰るような台詞と態度だったが、今の俺は『萎縮』という言葉からは程遠い状態だ。

それに、『負け犬』という言葉にはカチンときた。

「ふざけんな、俺は負け犬じゃねえ」

「じゃあ、やるのね？」

もう、どうにでもなれだ。

「いいよ」

「んじゃ、コレ」

そう言って、女は携帯の赤外線受信部を差し出してくる。
俺も習った。

「……」

「……」

携帯の画面からの光で、ぼんやりとお互いが映し出される。
光源のほぼ無い森の中で、携帯画面の光を頼りにアドレス交換している様は言いようもなく奇妙だ。

——ってというか、コレが女の子との初めてのアドレス交換じゃねーか。ふざけんなッ!!!

ロマンスの欠片もないアドレス交換が終わると、女は言った。

「んじゃ、今日は……もう土曜になってるか。土曜だから、日曜からね」

「まずは私がそっちに行くわ」

「おい……」

当然の様に女はそう言うので口を挟もうとしたが、とっさに止めた。

「……分かった」

「へえ……ここではレディーファーストするのね」

暗闇でも分かってしまうそのニヤつき顔は、非常に腹立たしい。
が、有利なのはこっちだ。

大体、俺は一週間程度で意思を変える気なんざねーし、こういう勝負は後攻めの方が圧倒的に有利じゃないか。

やはり、この女は馬鹿だ。

「んじゃ、日曜の10時くらいにメールするわ」

そう言い残して、女は近場に止めてあった原付に乗って帰って行った。

「くそ、原付まで一緒かよ」

舌打ちしながら、俺も原付に乗り込む。

「あ、そだ」

名前くらい確認しよう。

「んーっと、名前は……」

何だかんだで、女の子とメール交換したのは初めてなので少し興奮していた。

アドレス帳を開き、名前を確認する。

名前は――

『名前：斗貴子』

「――呪われてんのかよ」

すぐさま携帯をへし折りたい衝動にかられながら、俺は原付に火を入れる。

……途中、ガソリンが切れて20km近く押して帰った事は、もはや言うまでも無いだろう。

*

後でよくよく考えて見れば、別にあの女の指示に従う必要はまるで無かった。

あの場所にとっとと戻ってさっさと首を釣ってりゃ良かったのだが、何だかんだで結局俺は日曜の今日まで生きていた。

別に死ぬのが怖くなったとか、死ぬのが馬鹿らしくなったとか、新たな生きる希望を見つけたとか、そういうワケじゃない。

ただ、単純に。

あの女があまりにも自信満々なのが気になったのだ。

あの女が俺の予想の遥か斜め上を超えていく馬鹿でなければ、『死ぬ！』と決めて準備までした人間の意志がそうそう簡単に変わる筈も無い事くらい分かっている筈だ。

「……」

悩む。

あのメンヘラ発言からして、『童貞捨てたら悩みも吹っ飛ぶでしょう！』みたいな短絡的思考で来るとも思えない。

別に童貞捨てりゃ死ぬのやめるわけじゃないよ……いや、分かんないけど。さ

とにかく、何か秘策みたいな物があると思った。

そんな事を考えながら、メールで指定された駅前の良く分からない石像の前で待っていると、唐突に肩を叩かれた。

「お待たせ」

振り返ると、あの女だ。

昨夜は分からなかったが、髪は黒髪のショートボブで肩の辺りで揃えており、割と好みの髪型をしている。

が、顔はまあお世辞にも『悲劇のお姫様』を気取れる様な物では無い。

といっても、『ブス！』と一言で言ってしまう感じでもないが。

要は、良い意味でも悪い意味でも典型的なメンヘラだったというわけだ。

「何？ 他人の顔ジロジロ見て？」

「いや、本人かな一っと。昨日暗かったし」

「ハッ、キモ面で鳥目とは手に負えないわね」

一々腹立つなコイツ。

「はい、これ持って」

そう言うと、女は肩から掛けていたショルダーバッグをこちらに渡してくる。

「うおっ」

中々に、重い。

「何だコレ？」

「着いたら説明するわ。来なさい」

流れる様な自然さで他人を荷物もちにすると、その女は意気揚々と商店街の方へ歩いていった。

手ぶらで。

「……なんて性格の悪い女だ」

呟いて、本当に『性格の悪い方の女』なのか疑問に思う。

俺には『対等に会話したことがある女』など、コイツ以外に居なかった。

*

目的地は、何処にでもあつたような全国チェーンのファミレスだった。

その奥のトイレ付近の席に陣取ると、女は俺からショルダーバッグを奪い取り中から取り出して物を投げて寄越す。

それは、就職生が良く使っている様なスーツだった。

「トイレでそれに着替えてきて」

「いや、お前何する気……」

「さっさと行きなさいよ」

「……う」

有無を言わせぬ物言いに、大人しく従ってしまう。

着替えて帰ってくると、席には書類やファイルの様な物が散らばっていて。

「お前、やっぱり……」

トイレで着替えている段階で予測は出来た。

机に散らばっているファイルや書類の中身は、殆どが履歴書や求人広告、就活生へのアドバイスのプリントだった。

「ふーん、馬子にも衣装って言うじゃない」

スーツに着替えた俺を見て小馬鹿にしたように笑うと、女は『さっさと座れ』と身振りで示してくる。

——いや、いやいやいやちょっと待てッ！！

「……ふざけんなよ。お前、ハロワ職員にでもなったつもりか？」

「別に疑問は無いでしょ？ あんたが死にたい理由は就職出来ないからなんだから。就職出来りゃ死ぬ気なんて無くなるでしょ」

「そんな簡単に就職出来てりゃ苦勞するかよ。俺はな、50社以上受けてんだぞ！？ それ、全部書類審査で落ちてんだぞ！！ 分かるか？ この意味」

「うっわ、不景気とは言えあんた予想以上に終わってるわね」

「んなこた分かってんだよ！」

「まあまあ、新卒なんでしょ？ 何とかなるって」

「うう……」

その余裕のある態度に、イライラする。

きっとコイツ内定出てやがんだ。もしくはもう就職してやがんだ。
これはそういう奴らの余裕だ。

——死ねッ！ 地獄に落ちろッ！！

「そうねー、ココなんてどう？」

そう言って女が示してきた先は、どっかのド田舎の中小だった。

「無いな」

「何だよ？」

渡されたプリントを丸めるなり、食って掛かる様に女は突っ掛かってくる。

呆れた。

ほんと、低脳だなコイツ。

「いいか？ その辺のFラン出の馬鹿と一緒にすんじゃねーぞ？ 俺だぞ？ この俺だぞ？ その俺様がこんないつ潰れるかも分からんような、クッだらねー仕事してるド田舎の中小なんか行けるか馬鹿。お前とは違いーんだよお前とは、分かったか？」

ドヤッと、あらん限りのドヤ顔を試みる。

自分の低脳ぶりがやっと理解できたのか、
女はどこか焦点の定まらない遠い目をして——

「——死ね」

——殴られた。

*

「何であんたが就職出来ないか、大体のどこ分かったわ」

メガネが割れてしまった。
右目が腫れて痛い。

「なんだよ……当然じゃないか、俺は選ばれし……」

「黙れっ」

割れたレンズをはめ込みながらブツブツ呟いていると、女に頭を叩かれた。

「自分の実力もわきまえず、大手ばっか受けてりゃそりゃ全部書類ではじかれるわよ」

「妥当だよ。むしろ、妥協して……」

無言で殴られた。
左の方のレンズが割れた。

「やめろよ……俺、メガネが無いと携帯の画面すら見れねえよ」

「あんたが、その増長を止めればやめるわよ」

言いながら、女は深く溜息を付いた。

「これは……思っていた以上に難仕事ねえ。どうせアレなんでしょ？ 妥協しろって言ったって妥協しないんでしょう？」

「うむ」

俺は深々と頷く。

「あー、もう……こうなったら、あんたをどうにか大手に受かる様にするしか無さそうね」

「書類も通らないのに？」

「それもどうにかするのよ！」

そう言って、女は注文ブザーを鳴らす。

「まずは挨拶からはじめるわよ！ 『こんにちは！ 本日はよろしくお願ひします！』はい続けて！」

「え……いや、」

「ほら、さっさと言う！」

「だって、ブザー押したじゃん。店員来るってッ!？」

「だから押したのよ！ さっさと言いなさい!!」

「こ、こんにちは…は……………やっぱ、駄目だって。恥ずかしいって、店員来ちゃうって」

「うるさい！ さっさと言えッ!!」

「こ、こんにちわ！ 本日はお日柄も良くッ!!」

「違うわッ!!」

何？ この理不尽なスパルタ……。

「ご注文伺いに……」

「こんにちは!!」

「は、はいっ!？」

「続き、続きを言わない！！」

そういう風に店員をビビらせても、その女のスパルタ指導は続いた。

*

それから毎日、そのファミレスでの特訓となった。

挨拶だけでなく、その女の就活指導は多岐に渡っていた。

面接での正しい受け答えの仕方、相手に好印象を与える着こなしや態度、履歴書の正しい書き方等だ。

挨拶指導に関しては完全な脳筋体育会系仕様だったが、他は論理的で的確な知識に基づくものが多く、やっていて効果的であろうと核心させるような物ばかりだった。

見た目や言動から勝手にFランの馬鹿女子大生だと決めて掛かっていたが、実は違うのかもしれない。

単に雑談していても、キチンと高等教育を受けた事が分かる回答が多く。

また、メンヘラのイメージであるお花畑の様な思考回路とネチネチしたしつこさを見せる事は殆どなくて、口の悪さと態度の横柄さはあるもののアッサリと竹を割った様なサバサバとした性格をしていて、通常の会話をしていてイラつくという様な事は殆ど無かった。

ま、口が悪いから全体で見ればかなりの頻度でイラついているのだが。

とにかく、彼女が典型的なメンヘラであるという認識は改めなければいけないかもしれない。

その日。

履歴書の書き方についてお説教をくらいながら、そんな事を俺は思っていた。

「何なのよ！ この志望動機ッ！！ 『俺様を雇える事を光栄に思いなさい』っていうあんたの王様思考がアリアリと読み取れるじゃないの、このアホッ！！！」

「当然だろう」

「何が当然なのよ！ 社会のゴミ同然の癖にッ！！」

中々に腹の立つ事を言っていたが、俺はそれを寛大な心で聞き流し。
気になっていた事を尋ねた。

「なあ」

「何よ」

「お前、男と別れたから死ぬつつってたじゃん？」

「……それが？」

「いや、ほんとにそんだけなのかなーっと、思っ」

「……」

しばらく、返事が無かった。

書類を書くために下を向いていたので、覗き込むようにそっと見上げると、女は苦虫を
噛み潰した様な顔をしていた。

「そんだけ、といえはそんだけよ」

「そんだけって言わないと？」

「しっこいわね」

それは、酷く不機嫌な声で。

流石の俺でも『黙った方がいいかな？』と思ったが、そんな俺の心配を知ってか知らず
か女は深く溜息を付いた。

「そうね。あんたのは聞いたワケだしね……」

ガリガリと掻き毟るように髪をかきあげて、女は続ける。

「前、あの夜。何人目の特別な人だ？ とか言ってたでしょアンタ」

「ああ、うん」

「何人もなにも、最初だったのよ」

「……」

「ま、確かにあんたの言うとおりの最初の男じゃなかったわよ、別に。でもそれまでのどの男も本気だったとか、好きだったとか言うわけじゃなかったわ。ワリと割り切って、後腐れない様に付き合ってたわ」

なんだ、メンヘラじゃなくてただのビッチか。

と興味を失いかけたが、次の言葉はかなり衝撃的だった。

「その男との間にはね。子供、作ったのよ」

カラッと、グラスの氷が崩れた。

「子持ち？」

「墮ろした」

あまりにもサッパリとした返答で。

戸惑ったが、その様子は何処か悲しげだった。

「ここ重要なんだけどさ、避妊失敗ってわけじゃないのよ」

こちらに話しかけながら、こちらに話していないかの様な視線で、彼女は話す。

「結婚するつもりだったのよ。というか、予定だったのよ。一方的な取り決めじゃないわ。ちゃんと約束してた。だから構わないと思って……」

そこまで言って、彼女は息詰まる。

一泊置いてから、続けた。

「甘かったのかなあ。子供出来たら、青い顔して『墮ろせ』って。んで、墮ろしちゃ

んだよねえ、あたし……」

「……墮ろした頃には、男居なくなってた。でもねえ、まだ好きなのよ」

『だから死ぬの』と自傷する様に笑って、うつ伏せる様に彼女は机にもたれ掛かる。
そうして顔だけ上げて、こっちを見て『ははは』と笑う姿は、典型的な馬鹿女そのもの
だった。

もし、この時彼女が一言でも『子供、殺しちゃった……』などと墮ろした子供に対し
での自戒の念を言葉にしていたら。

俺は即立ち上がって、約束だろうが何だろうが全部無視して間違いなく首を釣って死ん
だだろう。

後悔を言葉にすることは、慰めを期待しての物だ。

慰めを期待するということは、許しを期待するという事だ。

許しが貰えると思っているという事だ。

墮ろす。墮ろさないは彼女の自由だ。

それは間違いないし、墮ろしたとしてソレが間違っているとは思わない。

男に騙された事。

騙されて墮ろしてしまった事。

それについては慰めを求めてもいいし、許しだって与えるべきだ。

ただ、自分で望んで子供を作り、

そして自分の勝手な事情で子供を殺してしまった事。

自分勝手に人間を殺した事は、慰めも、許しも貰っていい物だとは思えない。

それが間違っている事だとは思わない。

だが、それが許されて良いものだとはいえない。

それは彼女が永遠に抱えるべきもので、その逃げ出した男ならともかく、赤の他人と分
かち合って良いものではなかった。

それを、彼女は分かっているようだった。

「んっ！？ ホラホラッ、手が止まってる！ ちゃっちゃと書く書く！！」

パッと表情を切り替えて、彼女は手が止まっていた俺を明るい声で促す。

「いや、やっぱり志望動機はさ。俺の正直な気持ちを正確に伝えるのが誠実ってものじやあ……」

「誠実さの欠片も無い脳みそしといて、エラソーなこと言うなッ！！」

そう言って、俺の頭頂部を叩いてくるのはいつもその女だった。

この日。

いや、もう数日前からかもしれないが。

メンヘラだろうがビッチだろうがなんだろうが、俺はこの口が悪く態度も悪い馬鹿女を。

嫌いになれなくなっていた。

*

最終日の前日。

その女は朝一番に俺をファミレスに呼び出すと、いきなり書類と新幹線のチケットを投げて寄越した。

「何これ？」

「HITACHI。すぐに新幹線乗れば間に合うから」

『それだけ言えば分かるでしょ？』と言わんばかりの様子で、パクパクとモーニングを食べているが、俺には何の事かさっぱり分からん。

「詳しく」

「鈍いわね。その会社、書類審査は通ったから。今日、面接」

余計にワケが分からない。

確かにこの一週間、履歴書は腐るほど書いたが一通だって送っていないし、そもそも送った所でもう返事が来るわけが無い。

「書類だけは、通して貰えたから」

事も無げに、女は言う。

『もしかして、コイツすげえんじゃねえの?』と思った時には、その女はいつもの腹の立つニヤケ顔になっていた。

「どったの? 尊敬しちゃった?」

「無理」

「あっそ。書類通すのが限界だからね……二次・三次・最終は自分で何とかしないさいよ」

「そんなにあるのかよ……」

「ボヤかない! さっさと行く!!」

「俺を書類だけで通さないなんてどうかしてる……行ってくるわ」

「はいはい」

ぼやきながらも、俺はこの日終始ニヤニヤしっぱなしで。
新幹線に乗ってからも、ずっとご機嫌なままで。

面接も。

女との特訓の成果があったのかしらないが、凄く上手く行った。

ただまあ、入室のとき、

「こんにちはッ!!」

と、例の体育会系のノリで叫んでしまって、面接官をしょっぱなからビビらせてしまったが。

とにもかくにも、俺の初めての面接は極めて良好だったと言える。

比べる経験が何も無いのが、ちょっと不安だったけれども。

*

そうして向かえた最終日。

俺たちはこの一週間そうした様に、あのファミレスに居た。

「で、どーだった？」

「ん、割りとうまくいった」

「いやいや、そうじゃなくて」

「は？」

例の、あのニヤケ顔だった。

「死ぬ気、無くなったでしょ？」

『あ、そういう事か』と思わず思ってしまう。
正直な話、その約束も殆ど忘れかかっていた。

「いや、まだ結果出るまでわかんねーよ。やっぱ、落ちたら死にたいだろうし」

「結果って、いつ出るか分かってる？」

「それはまあこの時期だし、一ヶ月近くは……あ」

女は、まさに『してやったり』という表情をしていた。

「はい、私の勝ち。少なくとも、数週間は死ぬ気無くなったからねえー」

そう言って、女はさっさと立ち上がる。
咄嗟に手を掴んだ。

「待った」

「……何？」

「まだ俺のターンが有る」

「何言ってるの、あんた死ぬ気なくなったでしょ？負けよ、負け」

「まだ負けと決まってない——」

「他に何が……」

「——ドローがある！」

俺がそう言うと、女は心底呆れた様だった。

「馬鹿じゃないの。 どーせ、あんたは今死ぬなんいんだから私の死ぬ気を無くした所で……」

「嫌だ」

素直に、口から漏れた言葉だった。

「え？」

「いや、その……」

自分でも驚いた。

ここまでスムーズに、何も考えずに言葉が出てきたのは初めてだったのだ。

「……ほら、他人が死んだ木で死ぬとか。嫌じゃん？」

何とか取り繕うが、我ながら苦しい言い訳だった。

「……ふーん」

女はしばらく訝しげにこちらを見つめていたが、『分かった』と言って座った。

「で、何をしてくれるの？」

楽しげなその顔は、例のあの顔だった。

「それは……」

正直、何も考えていない。
だが、今それを悟られるのは不味い。

ハッターリというのは時に非常に大事だと、この一週間目の前の女に習ったばかりではな
いか。

「……お楽しみだ！」

「へえ」

「明日、明日な。明日になったら追々分かってくるさ」

そう言ってグラスの水を飲み干して立ち上がると、女に背を向けて一目散に駆け出した。

逃げているワケでは無い。
俺は天才だから、一晩考えればどうにかなるのだ。
戦略的撤退だ。

「……あんにゃろ、金払わなかった」

遠くの方で、そんな呟きが聞こえた気がした。

*

昨晚家に帰って、俺は散々悩んだ。

俺はもう正直、あの木で死にたいとか、そもそも死にたいという感情がどっかに消え失せていた。

ただ、女に死んで欲しくなかった。

しかし、どうすればあの女は自殺を思いとどまるのだろう？

ぶっちゃけ、女の決意はとても固い物に思われた。

女の死にたい理由は単純だ。

男に酷いフラれ方をした。しかし、未だにその男を忘れられない。
チョー苦しい、だから死ぬ。

うん、とっても分かりやすい。
分かってる。正直、やるべき事・やれる事ってのは分かってる。

でも、自信がまるで無かった。

だから、その日。
自分で呼び出したにも関わらず、俺の放った第一声はおもっくそ上ずっていた。

「遊園地に行こう」

「は？」

昨日、金を払ってファミレスを後にしなかった事を根に持っている女の声は、大分ドスを孕んだものだった。

精一杯のお洒落と、髪にワックスなんか塗っていた俺は、その声に心が折れそうになりながらも、俺はもう一度言う。

「遊園地に行こう」

「何で？」

正直、ココで泣かなかった自分を褒めてあげたい。
必死で唇をかみ締めて、俺は続ける。

「俺のプランに、必要なんだよ」

そんな俺の様子を怪訝そうに見つめながら、女は言った。

「あんた、何する気なの？」

駄目だ。無理だ。

俺の心はガラスのハートの様に脆いらしい。
もう、開き直るしかなかった。

「あー、もううっせー秘密秘密ッ！俺の緻密なまでに計算されたプランは完成して初めて凡人にも理解できるレベルまで行くんだよ！！文句言わずに、行くぞ！！！」

「……」

胡散臭い物でも見るように女は俺を睨んでいたが、諦めた様に溜息を吐いた。

「分かったわよ」

「よし、行くぞ！！」

こうして、俺たちは遊園地に向けて出発し。
そして、大いに盛り上がった……というのは微妙で、何か俺だけが常に空回りしている感は常にあって。

けれど、何度となく女も笑顔を見せていたので、多少は楽しんでいたと、信じたい。

結局、俺はこの日から毎日、この女を連れまわして遊んでいただけだった。
女は数日はずっと訝しがっていたが、途中からは一緒に楽しんでいたと思う。

*

で、最終日。
当然、女は疑問を俺にぶつけた。

「で、あんた何がしたかったの？」

そう聞かれた時、『俺の負けだな』と確信した。

「やっぱ、無理だったな」

「だから、何が？」

「この一週間で、お前を俺に惚れさせること」

なるべく、サラッと。

「……」

クールに。
どっかのメロドラマのカッコイイ主人公が如く、囁く、

「……ぷっ、」

ことなんて、やっぱ無理で。

「ぷっ、くっ、クククッ！ アッハハハッ！！」

オモックソ、爆笑されていた。

「ちょ、っと。アンタ、その顔でその台詞は無いわ」

「わかってるよ」

「顔まで真っ赤じゃーん」

「うっせえ」

知っていたさ。

ただ、試さずにはいられなかっただけで。

「いやいや、そんな恥ずかしそうにしないで！ 良い線行ってたんじゃない？」

「男が理由で死んじゃうような馬鹿女止めるには、確かにソレが早いわよ」

「うん、ちょっとキュンと来たかも。そんな気がしないでもないわ！」

どこまで本気か分からない様な事を言いながら、女は腹を抱えて笑っていた。

でも、まあそんな馬鹿にしたような言葉にも。

何故だかもう悪い気はしない。

だけど。

「なあ、やっぱ俺の負けか？」

「そうね、アンタの勝ちは無いわね」

『アタシはこう見えても面食いななのよ？』と付け足して、女は笑う。

分かっていた。

無理であろうことは分かっていたが。

けど、それでも。

何かの抑止くらいにはなるかと思ったんだ。

「……でも、ねー。良かったよ」

「ん」

「足しになったわ、なんてゆーか」

「うん」

「冥土の土産みたいなの？」

「そか」

「この一週間さ、いや、あんたに対して怒鳴ってたその前の一週間も。すっごく、充実してたっていうか。嬉しかったよ」

「ああ」

「だってさー、あんた一生懸命なんだもん。私に。私にだよ？ 私、分かってるよ？ 自分がそんな魅力的な女じゃないって。口は悪いし、態度も太いし、スタイルが良い訳でもない」

「そだな」

「顔も……。正直、微妙だしね。男が、多少なりとも居たのは、すぐ寝るからだって知ってた」

「そうか」

「そう、でもあんたそんなの関係無かったじゃん？ そういう事抜きで、あたしに真剣になってくれたじゃん！ほんと、ほんとに嬉しかったよ！」

「……」

「なんていうかさ、好意を持たれるってこういう事なんだなーって。あたし、今ここに居ていいんだなーって、だから——」

そう言って、曖昧な返事しかしない俺を責めるように。

「——だから、泣くんじゃないわよっ！」

彼女は、泣いている俺の肩を叩いた。

「……くそが」

思わず、ぼやく。
涙に擦れた声で、搾り出すようにぼやく。

「泣くな？」

「……ふざけるんじゃねえぞ」

ふざけるなよ。
ほんとに、ふざけるなよ。

この期に及んで泣くなだと！？

この馬鹿女は何処まで低脳なんだ。
何処まで傲慢で、どこまで態度が悪くて、何処まで口が悪い。
そして、何度俺に命令したら気がすむッ！！

泣くなだ！？ あぁ？ ざけんじゃねーぞっ！！！！

てめーなんか。何人目かも分からん男にフラれたからって、死ぬって言うくせに！
本気だろうが、何だろうが予行演習もなにもバッチリだったはずだろうが！！！！

こっちはな！
こっちはなあっ！！！！？

この人生22年間。
惚れたのは一回だけ。

腹立つ事にかーちゃんと同じ名前の——

「——お前が、初恋なんだぞ？」

言いながら、俺は泣いていた。

目の前の景色も見えないくらい、号泣していた。

ビッチでメンヘラで性格も悪く、顔もスタイルも微妙。
そんな女相手に泣きながらすがり付く、我ながら最低にかっこ悪い男の図だ。

でも仕方ない。
仕方ねーじゃねーか。

だって、惚れたのだ。
ほんとに、惚れちまったんだよ。

ブラウン管の向こうの、幻想とも夢見ともつかない勘違いじゃなく。

ビッチでメンヘラで性格も顔もスタイルも微妙な、この女に。
惚れちまったんだ。

恋しちゃったんだよ！ 初恋になっちゃんだよ！！

「死ぬなよ。やめろよ。俺が命がけで幸せにするから」

「命、かけるから！」

我ながら、糞みたいな台詞だった。

知性の欠片も感じられない糞台詞。
号泣して、嗚咽を漏らしながら言ってる様はまるで駄々っ子だ。

まるでカッコ良くないし、まるで決まっくないし、まるでロマンチックじゃない。
千年の恋だって冷めるかもしれないみっともなさだ。

でも、真剣だったのだ。
ガチだった。

『本気になりやられる！』といい続けて、22年間本気にならなかった俺の始めて本気だった。

なりふりなんて、構っていられなかったのだ。

「……」

俺のあまりの台詞と、あんまりな様子に、彼女はしばし呆気にとられ。

「馬鹿ね」

が、すぐに笑って。

「……ありがとう」

そう言い残して背を向けて、彼女は駅に消えていく。

「……」

あまりにもアッサリと、当然の様に消えていく背中。

その後を追うことも出来ず、嗚咽と鼻水を飲み込みながら突っ立って……。

「……何が本気だよ」

ほら、やっぱり無理だった。

『本気になりやられる！』なんてホラも良いとこだ。

言ったのは昔の偉人か？ 偉人なんてまるでアテにならねーな。

本気になったら即失敗だよ。

ふざけんじゃねえよ。

「こたえるなあ」

呟いて、思い返すと。

「……」

ああ、やっぱり。

あの女だって泣いてるじゃねーか。

「ほんと、ふざけんじゃねーよ！」

叫んでみる。

叫んでも、いつの間にか遠巻きに集まっていた見物人達がビビる以外に、当然事態は好転しなくて。

「……」

モーゼの様に割れた見物客の群れを突っ切って、俺はさっさと逃げ帰るしかなくて。だからこそ、俺はある結論に至れたのだ。

「——死のう」

やっぱり、答えなんて始めから決まっていたのだ。



そうして、二ヶ月がたった。

『は？ お前死んだんじゃ無かったのかよ！』

って突っ込みはカンベンして欲しい。

人間は変わるんだって、日々成長していく生き物なのさ。

まあ、つまりあの後、『何処で死のう……』なんて、ウダウダしていたら面接に受かった通知が来てその後もトントン受かって今日まで生き残っちゃったのさ。

「希望があれば人間生き残っちゃうもんさ」

呟いて、景色を確認する。

間違いなく、あの時のあの木の場所だった。

「何度見ても、自殺には良い場所だな」

二ヶ月たっても変わらないその様子に、ちょっと感心してしまう。

何でまたココにいるのか？

それには深いワケがある。詳しく説明したらそれだけで朝になるくらい長い。

要は、すげー失敗した。間違いなく落ちた。

「ひとの生き死になんて簡単なもんだ」

つまり、そういう事だ。

希望が有れば何処までも生き残るが、無ければアッサリ人は死ぬのだ。

時刻は良い頃合だ。

勿論、周りには人は誰も居ない。

「死ぬか」

呟いて、準備した台にのり、輪っかに首を通そうとすると。

「……」

「……」

見たことも無い……いや、すっげー見たことある女と目が合った。

つまり、まあ、

「ここで、死ぬ気なの？」

あの女だ。

「ああ」

「何で？」

「落ちた」

「そう」

そう言って、女は面倒臭そうに髪をかきあげる。

疑問は山ほどあった。

言いたい事も山ほどあった。

でも、これ以上の疑問も言いたいことも見当たらなかった。

「何でまだ生きてんの？」

「……」

尋ねると、バツが悪そうな顔をして女は顔を背けた。

「あのさ、あたし実は毎日ここに来てたんだよね」

「は？」

「でも、何？ なんつーの？ 毎日死ぬ為にここに来て、死ねなくて。来る意味も、死にに来るっていうよりか。待つみたいな意味が強くなって」

「ほら、人って希望があると死ねないもんじゃない？」

『ね？』と同意を求めてくるその顔は、
必死でポーカークフェイスを気取っちゃいるけど、

「……だって、男に惚れられるとか。はじめてだったから」

「その、もう一度どんな男だったか確認しとかないと、気になって気になって……」

耳まで真っ赤で。

俺はその瞬間、手にしていた縄なんざ手放して絶対に首に縄が掛からない様に降りた。

なるほど、偉人ってやつは名前に負けず偉大なもんだ。

『本気でやりゃできる！』も『希望がありゃ生きていける！』も、確かにその通りだ。

俺は死ぬ気なんざコレっぽっちも無くなっていた。

「……なるほど」

かと言って、このまま『死ぬのやめた！』じゃあまりにもかっこ悪い。
つか、癪だ。

何か、何か困らせたい。

『どうしようか？』と悩んでいると、死ぬ・死なないで悩んでいると勘違いしたらしい。

女は慌てて提案してくる。

「分かった。2週間くれない？」

その台詞が、^{デジャブ}既視感過ぎて。

そして、俺にはあまりにも嬉しすぎて——

「お互い、自殺するのを2週間伸ば——きゃっ！？」

——とても二週間も待てない俺は、さっさと彼女を抱きしめた。

おわり

追記：結局その後、森永 真理は 『 HITACH』に受かったかもしれません。
内定、おめでとうございます。